

# '69県勢ビッグテン決まる

過ぎ去ろうとする県政一年を回顧、反省し、新しい年への礎にしようと、ことしも恒例の「県勢10大ニュース」が、庁議でこのほど別稿のように決定した。

## ① 胎動開始した北上山系への挑戦

七月二十八日、四十三年度から向こう八年間の県総合開発を方向づける「県勢発展計画」が、庁議で正式決定した。三十年代後半に作成した「県総合開発計画」が、その後の社会情勢の変化から手直しの必要が生じたため、県企画部が中心になって作業に当たったもので、総合開発計画が全国との格差是正を目標としたのに対し、今度の発展計画は、名前が示すように「大県」として発展する道を示すことをねらいにしている。

新しい発展計画は新全国総合開発計画（五月三十日閣議決定）に対応し、地域開発の戦略になる大規模開発プロジェクト（事業計画）をふんだんに盛り込んだのが特色。東北新幹線、東北縦貫自動車道、北上山系の開発、北上平野高生産性農業、三陸沖に海底牧場建設、北上川の

清流化、広域観光など九本の大規模プロジェクトを計画化し、遂次実施に移すことにしている。

このうち、北上山系の開発が早くも「胎動」を開始した。七月一日、県に北上山系開発調査室を設置。全国でも初の試みである航空機による大がかりな調査活動が行なわれている。

県土の三分の二（二百六万七）、全国六番目の広さの岐阜県に匹敵する北上山系は、数多くの開発可能地を包含しながら未開発のまま取り残されてきた。この地に公共事業費六千億円、民間資本を見込むと八千億円〜一兆円を投入する大規模な開発が進められようとしている。

開発は畜産、林業が中心だが、山系の中心部に四車線の縦断道建設。地域内で乳牛十五万頭、肉牛二十万頭を飼育、二十万二千坪の造林をするほか地下資源、観光開発なども合わせた総合的な開発をはかろうというのが計画の骨子。本年度から五カ年間で基本調査を終え、本格的着工はそれ以降となる。

## ② 苦心の昇格運動ついに実る

建設省は、このほど本県関係四路線を含む全国七十一地方道からの国道昇格を

## ③ 喜びを乗せて来春オープン

十月二十九日、三陸縦貫鉄道盛線（釜石―盛岡）のうち盛―綾里間九・五キロの部分開業が運輸大臣から認可された。同区間の部分開業は、国鉄の赤字路線廃止問題もからみ、苦難の連続だっただけに地元では吉報にわいた。

盛―綾里間は、日本鉄道公団が四十二年二月着工。用地買収、路盤工事を終え十月いっぱいまで全路線のレール敷設工事を完了。これまで本年度予算を含め二十三億五千万円が投入された。工事で残されているのがホーム、待合室などの営業設備。公団側、盛鉄側とも「年度内開業を目ざして馬力をかけたい」としており四十五年三月には開業される見通しだ。

盛―綾里間の部分開業は、三陸縦貫鉄道としては柳津線前谷地―柳津間（宮城県）について二番目。現在着工期間として部分的に建設中の他の路線（久慈線久慈―普代間、同線田老―宮古間、盛線綾里―吉浜間、小本線浅内―岩泉間）も工事が急がれており、これらの路線の早期完工・開業の呼び水としての意義も大きい。

建設進む三陸縦貫鉄道  
— 未完成区間



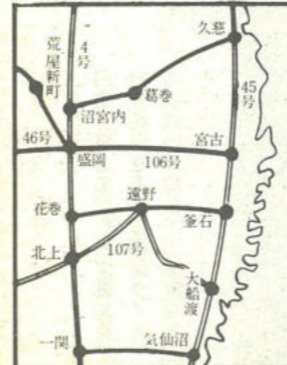
内定。十一月中には政令化して正式決定の運びとなった。

国道昇格が決定した本県関係の路線は▽主要地方道久慈―沼宮内線（七十七・五キロ）▽主要地方道復合花巻―釜石間（九十一・一キロ）▽主要地方道一関―気仙沼線（本県分四十一・七キロ、宮城県分八・二キロ）▽主要地方道盛岡―十和田線（本県分六十三・四キロ、秋田県分二十二・七キロ）の四ルート。

朗報を受けた県土木部では「本県の国道昇格は、二十八年の百六号、百七号以来十五年ぶり。地元と県が大同団結して強力な昇格運動を展開してきたが、四路線が一度に昇格するとは夢にも考えていなかった。」と喜びの表情をかくしきれない様子。

国道指定によって、国庫補助率が三分の二（県道）から四分の三にアップするのが従来の建前。それだけ県費の負担が減るので、その分を県道整備に投入出来る。また、昇格四路線についても、今後高額補助のもとに整備が進められる見込みであり、昇格決定の実益は大きい。

国道に昇格した4路線



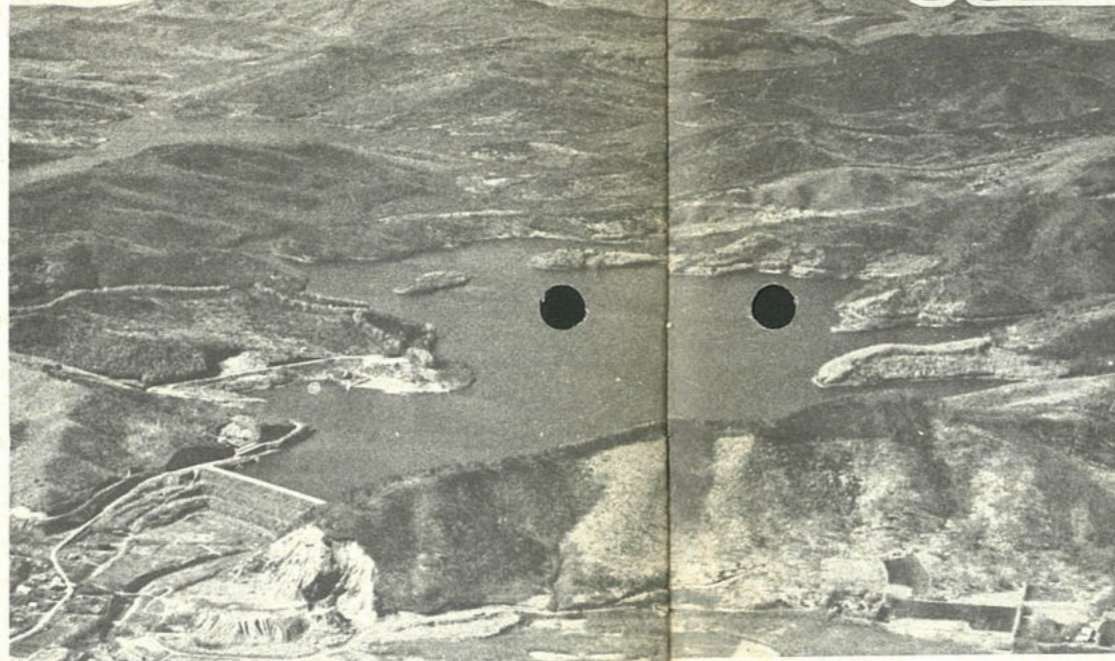
レール敷設も終り、待望の来春開業  
を待つ盛線。



## ④ 国内最初を誇る超大型林道

九月八日に完成した奥岩泉林道は、岩泉町門山形村関を結ぶ総延長四十七・七キロ（巾員四・六メートル）。岩泉町の小川・安楽境には延長七百九十メートルの大型トンネルもできあがり、通称スーパー林道と呼ばれるだけあって、数ある林道の中でも超大型を誇る。

奥岩泉林道は、森林開発公団が昭和四十年十一月以来九億六千八百万円を投じて建設してきた。スーパー林道は、いまでもこそ全国十一カ所で工事が進められているが、当時着工したのはこの奥岩泉線



航空機による調査活動を中心に動き出した北上山系の開発。写真は同調査機から撮影。岩洞湖、岩手山を望む。

## '69 県勢 ビッグテン

- ① 県勢発展計画画樹立し、北上山系の総合開発緒につく。
- ② 県道四路線の国道昇格決定。
- ③ 三陸縦貫鉄道の建設進捗し、盛―綾里間の開業認可さる。
- ④ 奥岩泉スーパー林道が完成。
- ⑤ 国営横ヶ石開拓建設事業が完工。
- ⑥ 県開発公社発足し、盛岡卸売団地の構想なる。
- ⑦ 県営有料道路八幡平線の舗装完了し、同小岩井線・県営国民宿舎着工す。
- ⑧ 全国に先がけ医師確保恒久対策発足す。
- ⑨ 岩手国体の開催諸準備着々進む。
- ⑩ 農業改良普及所、家畜保健衛生所を統合整備し、衛生研究所、水産試験場、農業博物館、天体ドーム完成するなど諸施設整備進む。

を含む三路線だけで、完成をみたのは奥岩泉線が第一号。

沿線には、小川地区の救済、安家地区の折壁、大平、坂本、大坂本などの部落が点在し、従来、交通の便が極度に悪く恵まれない地域とされてきただけに、地

### ⑤ 百億円を投じて不毛の原野を美田に

十一年の歳月と開連事業含み約百億円の巨費を投入した国営猿ヶ石開拓建設事業が完了。十月十四日、江刺市体育館で記念式典が盛大に挙行された。

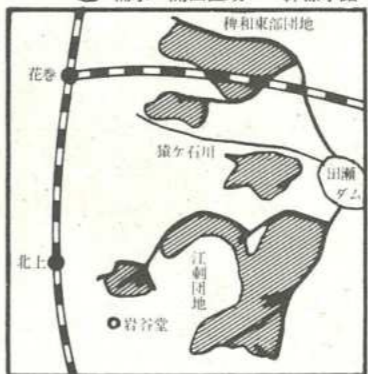
同事業は、北上川特定地域開発事業の一環として設けられた猿ヶ石川の田瀬ダムに水源を求め江刺、花巻、北上、東和石鳥谷の三市二町に用水路を新設して、未開発の山林、原野を開田しようというもの。

昭和三十四年着工。国営工事ではこの



森林開発の大動脈として奥岩泉林道が完成。

完工した猿ヶ石開拓建設  
● 補水・開田区域 — 幹線水路



間約五十五億円を費して用水路四十三路線(延長八十・)・排水路二十路線(延長五十・)・農業道路二十路線(延長八十・)を建設した。また、関連した団体営事業として猿ヶ石南部、北部の両土地改良区が、用水路沿いに約四十五億円を投入。およそ三千三百畝の原野が黄金の美田に生まれかわった。

当地域一帯は日照りが続けば用水の補給に悩むというのが従来姿。水量が豊富な猿ヶ石川からの導水を、という地域

農民の悲願が十一年ぶりに実現した。

### ⑥ 北東北の流通拠点をめざす

四月十日、県開発公社(理事長千田知事、盛岡市農林会館四階)が発足。地域開発の土台づくりを使命に、その業務を開始した。公社の業務は国、県、市町村の開発計画に沿い、地域開発に必要な公共的な用地を先行取得、造成して安い価格で売り渡し、開発のスムーズ化をはかるというもの。

四月には、県と業界がタイアップして盛岡卸売団地の青写真が固まり、開発公社ではいまその用地買収と取り組んでいる。盛岡卸売団地は、盛岡町南方郊外三十万平方メートルに卸売業者の店舗、倉庫、トラックターミナル、各種関連施設を建設、盛岡市中央卸売市場であつからう生鮮食料品を除く全商品の一大流通拠点にしようという構想。団地加入業者は、最終的には県内から百六十社が見込まれている。

四十五年度に公社の整地が終り、四十六年着工、四十八年完成の計画。完成すれば生産性の向上、中間コストの軽減、物価の安定など効果が大きいだけに早期実現が待たれるところ。なお、開発公社では、今後、東北縦貫自動車道インターチェンジ周辺関連用地の取得、北上市・金ケ崎町を中心とした内陸大規模工場団地の整備、などを手がける方針。

来秋の部分開業めざし建設進む小岩井有料道路。

### ⑦ 前進する県営有料道路事業

昨年七月以来、県企業局が総工費三億五千万円で建設中の県営八幡平有料道路(アスピーテライン)は、ことし十月いっばいで全線の舗装が完了。来年五月には岩手、秋田をまたぐ快速なドライブ旅行が楽しめる。県営有料道路二番手として、小岩井線も六月に着手した。小岩井農場入口―滝沢村相ノ沢牧場内―網張休暇村の十八・三・で、車道巾は六。現在小岩井農場入口―同遊園地間六。が工事中この区間は来年八月に開通する。残る十二・三。は来年度着手、四十七年四月に全通させる計画。

八幡平藤七地区では、県下初の県営国



### ⑨ 国体準備ピッチ上がり本番に自信

ことしは岩手国体を来年に控え、施設づくり、選手強化、道路整備、運輸、県民運動、民泊などの受け入れ準備が意欲的に進められた。また、本番に備えた数々のリハーサル大会、十月十日の一年前記念大会も好評で、国体成功への自信を深めた。

肝心の競技施設づくりは、県下五十五会場のうち四十八会場が完成。新設施設二十八中宮古湾のヨットハーバー、県営野球場(盛岡)の二つが未完成だが、前者は来年六月、後者は来年三月完成を目標に工事が急ピッチ。県営陸上競技場、釜石市営プールのスタンド増設も、開催日までに完成させるメドがついた。民泊は、夏秋季合わせて七千三百名分を確保する方針だが、盛岡地区を除き目標をほぼ達成。立ち遅れた盛岡の民泊も十二月中には確保できる見通し。

選手強化では、長崎国体で、これまでの成果がどう実るか注目されたが、成績は総合二十三位と昨年の二十七位から前進したものの、目標(二十位以内)を下回った。



「耕す漁業」に取り組む県水試。

病センターわきに移転新築。総工費六千百万円。県民の保健衛生を守るため各種の細菌検査、化学試験、食品衛生検査などを担当している。

▲県水産試験場 釜石市新浜地内に木造の旧庁舎を解体して新築。総工費一億三千三百万円。最新式の実験研究機器が完備し、全国一の設備内容のもと、海の科学」に取り組んでいる。

▲県立農業博物館 P17参照。

▲天体ドーム 盛岡市高松二丁目の県立教育センターに十二月末完成。総工費千二百万円。直径二十。の屈折式天体望遠鏡は、東北の教育機関では最大。ド



岩手国体を記念して県営運動公園に青年像が建つ。

民宿舎の建設がはじまった。百五十人(日帰り客三百人)収容の宿舎で、鉄筋コンクリート地下二階、地上二階、延べ二千四百平方メートル、工事費一億七千七百万円。来年の岩手国体(秋季)までにはオープンする見込み。

### ⑧ 奨学制通じ医師50人を確保

厚生関係で画期的なものとして、医師確保対策制度が話題を呼んだ。

岩手医大で特別奨学制度を創設、奨学生が卒業後一定期間知事が指定する医療機関に勤務することを条件として、大学において医師を養成する。養成経費に対して、県は大学に補助金を交付する――というのが制度の内容。

奨学生は本県出身者に限られ、入学金の全額、奨学料の三分の二が貸与される卒業後、一定期間知事指定の医療機関に勤務すれば返還が免除される。この補助事業は、ことしから五年間毎年十人を対象に継続して行ない、医師の県内定着を見込んで延べ五十人の医師が将来恒久的に県内に確保されることになる。

県内の医師数は、昨年十二月末で人口十万人当たり百十一・五人。東北では宮城県に次いで二位だが、全国平均を下回っており、郡部ほど医師不足は深刻。この制度は全国初のケースでもあり、昨今の「医師窮乏症」に取り組み意欲的な施策として各方面から注目されている。

### ⑩ 施設関係の整備落成相次ぐ

▲県衛生研究所 盛岡市内丸の県成人